

子どもの反抗・自己主張とそれに対する母親の感情および対処

— 2歳と3歳との比較 —

高濱 裕 子* 渡 辺 利 子**

本論の目的は、子どもの反抗・自己主張の状況を2歳と3歳とで比較し、子どもの発達的变化に対する母親の感情と対処の構造とを明らかにすることであった。対象は、子どもの反抗期に関するプロジェクト研究に1歳時点で登録した母親のうち、2歳時点の調査に応じた117名とさらに3歳まで応じた97名であった。子どもは全て核家族の第一子であった。5つの課題を検討した結果、3歳点で反抗は5割が、自己主張は7割が強まったと認知されていた；反抗的になる場面は特定の場面からより多様な場面へと変化した；3歳の自己主張には質的な変化が生じていた；3歳の母親は、2歳の母親よりも否定的感情をより強く感じていた；子どもの反抗・自己主張の変化は母親の対処に影響を与えており、3歳の母親の対処はより明確な構造をもっていた；3歳の洗練されない自己主張が力による統制やいいなりといった母親の対処へ影響し、さらに母親の否定的感情を通して権威的対処へ影響を及ぼしていた。縦断データの特徴を活かした、さらなる分析の必要性が議論された。

問 題

成人期の発達への関心が高まり、とりわけ親に関する研究の進展によって、子どもの発達的变化が親行動の再組織化という課題を浮上させることが明らかにされている(氏家・高濱, 1994; 柏木・若松, 1994)。この考えにしがたえば、2歳頃から本格化する子どもの反抗期は、まさに親に新たな発達課題をつきつけることになる。

心理・社会的危機の概念によって人間の一生涯を俯瞰する視点を提供したのはErikson (1989)であった。彼によれば、成人期にいる親の対立命題は「生殖性対自己—耽溺と停滞」である。その解決によって「世話」が現れてくるという。一方、本論で対象とする幼児期初期の子どもの対立命題は、「自律性対恥、疑惑」である。その解決によって「意志」が現れてくる。これは、「反抗的な衝動に完全に身を委ねて誰にも依存していないかのように振る舞おうとする時と、他者の意志を自分自身に強制して再び依存的になる時があることである。この二つの均衡をとるために、芽生え始めた意志の力が、自由な選択と自己—抑制の成熟とともに助けるのである」(pp.105-106)。したがって、子どもの

意志をいかに扱うか、つまり新たな状態にある子どもの世話は、親にとっての新たな問題となるのである。

坂上 (2005) によれば、歩行開始期の子どもをもつ親は、子どもとの関係性の再編という発達課題に直面する。当初、親は子どもの反抗や自己主張に巻き込まれるものの、やがて未分化であった子どもの視点と母親自身の視点(ソーシャライザーの視点と個人的視点)の分化と統合を果たしてゆくという。換言すれば、親子といえども独立した人格をもつ存在であることを認識し、子どもの自律性を考慮した対応が可能になるということであろう。とはいえ、横断的データをベースにしているため、システムの変化のプロセスが描かれていない点に課題がある。

高濱・渡辺・坂上・高辻・野澤(投稿中)は、親子システムの変容プロセスを縦断データにもとづいて検討した。子どもが2歳になる前から1年以上にわたって繰り返し面接をおこなった結果、子どもの反抗や自己主張が本格化すると、定常状態にあった親子システムに変化がもち込まれる。高まりゆく反抗・自己主張は、システムの平衡状態を崩すことになり、その結果システムにはさまざまな資源がもち込まれるようになる。さらに子どもの言語発達や生活習慣の確立などの変化によって、親はそれまでの行動を再調整し、やが

キーワード：反抗・自己主張、2歳と3歳、母親の感情、母親の対処

* お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター ** 武蔵野大学現代社会学部

て子どもの発達の変化に適応していった。

これらはごく最近おこなわれた研究であるが、このタイプの研究はこれまであまりおこなわれていない。日本には子どもの反抗期に関する組織的なデータが極めて少なく（唯一Ujii, 1977；氏家, 1995があるのみ）、この時期の子どもをもつ親へのアドバイスは一般論や経験的なものが多い。しかも子どもの発達に中心的関心があり、親が自分自身の行動をいかに調整するか、親の抱く感情をどのように扱うのかといった観点はほとんどみられない。親への支援を検討するには、親側に焦点化した研究が不可欠と考えられる。

このような実情をふまえ、本研究プロジェクトは実証的なデータを収集し、その結果をふまえて親への支援を検討することを目的にスタートした。本論では2歳と3歳のデータにもとづいて、子どもの反抗・自己主張とそれに対処する親の行動の発達の変化を検討することが目的である。

本論のデータは縦断データであり、今後3年間の子どもの発達の変化とそれに対する親の認識や親行動の変化を、1歳時点で測定した気質や親の認識する子どもの扱いにくさなどとの関連から詳細に分析する予定である。その前段階として、2歳と3歳の反抗と自己主張の実情、およびそれに対する親の反応を比較検討しておきたい。

本論の検討課題は、(1)反抗・自己主張は加齢とともにどのように変化するか、(2)子どもの反抗・自己主張の変化を、3歳時点で親がどのように認知するか、(3)子どもが反抗的になるのはどのような時か、そして加齢による違いがあるか、(4)2歳と3歳における子どもの反抗・自己主張にはいかなる違いがあるか、(5)子どもの反抗・自己主張が、親の感情や行動にどのような影響を及ぼすか、また、子どもの年齢によってその影響には違いがあるか、の5点である。

方法

調査対象：子どもの反抗期についてのプロジェクト研究に1歳時点で登録した236名の母親のうち、2歳時点の質問紙調査に応じた117名と、さらに3歳までの継続調査に応じた97名である。子どもは全て核家族の第一子であった。なお2歳時点の協力者の内訳は、愛知県下のA市在住者が36名、東京都下のB市在住者が82名であった。3歳時点の協力者は、A市在住者が29名、B市在住者が68名であった。本論では両地域のサンプルを合算して分析する。

調査方法：1歳時点での参加者のリクルートの詳細や対象の属性については、高濱・渡辺(2006)を参照されたい。1歳時点でこの研究プロジェクトに登録した236名のうち継続参加が可能と回答した約7割の母親に対して、子どもの2歳の誕生日を目途に第2回目の調査表を送付した。回答者は117名で、回収率は67.4%であった。この回答者に対して、子どもの3歳の誕生日を目途に第3回目の調査表を送付した。回答者は97名で、回収率は82.2%であった。

調査内容：質問紙は次の4つの内容から構成されている。①人口統計学的変数：家族の状況（父母の年齢、最終卒業校、職業、結婚年数など）、②子ども変数：子どもの生育歴、行動特徴、扱いやすさ、反抗の状況、③母親変数：しつけの目標、反抗の扱い、親業ストレス（親業に対する自信、親役割による欲求不満など）、母親としての評価、抑うつ性、ソーシャルサポートなど、④夫婦変数：夫婦関係（妻に対する夫の態度、愛情関係）。各年齢ごとの質問紙の項目は、子どもの行動特徴に関する内容が異なっており、1歳では気質特徴について、2歳と3歳では反抗や自己主張について尋ねた。

分析方法：子どもの反抗や自己主張の状況と、それに対する母親の感情および母親の対処方略を分析の対象とした。2歳と3歳に共通する内容は、①子どもの反抗の程度、②子どもが反抗的になる時（5項目）、③子どもの反抗的態度に対する母親の感情（8項目）、④子どもの反抗への母親の対応（13項目）、⑤子どもの自己主張の程度、⑥子どもの反抗・自己主張のしかた（7項目）、⑦子どもの自己主張への母親の対応（5項目）であった。3歳のみの項目は、⑧2歳時点と比較した子どもの反抗および自己主張の変化についての評価であった。

- ① 子どもの反抗の程度については、「まだそれほど感じない」「いくらか反抗的かなと思う」「かなり反抗的になってきた」「非常に反抗的である」の4件法で回答してもらった。
- ② 子どもが反抗的になる時については、「子どもの行動を中断させようとする時」「子どもの行動になれこれ口をはさむ時」「子どもに何か依頼する時」「テーブルマナーなど、あるルールに従わせようとする時」「親の選択を子どもに押しつけようとする時」の中から、あてはまる場面を複数選択してもらった。

③ 子どもの反抗的態度に対する母親の感情については、「困惑してしまう」「腹が立ってしまう」「いらだってしまう」「馬鹿にされたように感じる」「いやになってしまう」「がっかりしてしまう」「元気がでる」「うれしい」の8項目について、「よくある」「かなりある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の5件法で回答してもらい、それぞれ順番に1点から5点を与えて得点化した。なお得点が高いほどそれぞれの感情を強く感じていることを示すようにリコードしてある。

④ 子どもの反抗への母親の対応については、「腹が立って、本気で怒ってしまう」「いうことを聞かせるために体罰を加える」「いうことを聞かせるために脅しを用いる」「いうことを聞かせるためにごほうびをちらつかせる」「もう知りません」といってしばらく無視する」「外に出したり、別室に閉じ込めたりする」「子どもが折れるまで、初めの要求を続ける（意地になって）」「子どもが従うまで、根気よく待ち続ける」「自分が折れて、子どものいいなりになってしまう」「子どもが納得できるようにいい方をいろいろと変えて説得を試みる」「困惑して、どうしてよいか分からなくなる」「子どもの考えや反抗の理由をいわせようとする」「とりあえず、子どもの好きなようにさせてから（満足させてから）、改めて初めの要求をする」の13項目について、「よくある」「かなりある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の5件法で回答してもらい、それぞれ順番に1点から5点を与えて得点化した。なお得点が高いほどそれぞれの対応を頻繁に用いることを示すようにリコードしてある。

⑤ 子どもの反抗・自己主張の程度については、「まだそれほど感じない」「いくらか感じる」「かなり自己主張的になってきた」「非常に自己主張が強い」の4件法で回答してもらった。

⑥ 子どもの反抗・自己主張のしかたについては、「はっきりと自分のやりたいことをいう」「「いやだ!」とか「やる」「欲しい」という主張を繰り返し続ける」「親のいうことに耳を貸さず、自分の思った通りにし続けようとする」「かんしゃくを起こしたりだだをこねて我を通そうとする」「ものを投げたり叩いたりけったりして我を通そうとする」「泣いて我を通そうとする」「祖父母や父親など甘い人に頼って自分の思い通りにしようとする」の7項目について、「よくある」「かなりある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の5件法で回答してもらい、

それぞれ順番に1点から5点を与えて得点化した。なお得点が高いほどそれぞれの行動を頻繁にとることを示すようにリコードしてある。

⑦ 子どもの自己主張への母親の対応については、「危険でなかったり他人に迷惑をかけないものであれば、子どもの主張を尊重し思い通りにさせる」「基本的には子どもの思い通りにさせるが、やり方などに条件をつける」「子どもの主張を無視し、あくまでも親の思い通りにさせようとする」「子どもに受け入れられるような妥協案を考え提案する」「一度いいだしたら聞かないので、放っておく」の5項目について、「よくある」「かなりある」「時々ある」「あまりない」「全くない」の5件法で回答してもらい、それぞれ順番に1点から5点を与えて得点化した。なお得点が高いほどそれぞれの対応を頻繁に用いることを示すようにリコードしてある。

⑧ 2歳時点と比較した子どもの反抗および自己主張の変化についての評価は、2歳時点と比べて反抗あるいは自己主張が、「落ち着いた」「変化はない」「強くなった」の3件法で回答してもらった。

結果と考察

1. 母親の認知した反抗・自己主張の変化

(1) 反抗・自己主張の加齢による変化

母親に子どもが反抗的になったと感じるかを尋ねた結果をFigure 1に、同様に自己主張が強くなったと感じるかを尋ねた結果をFigure 2に示した。

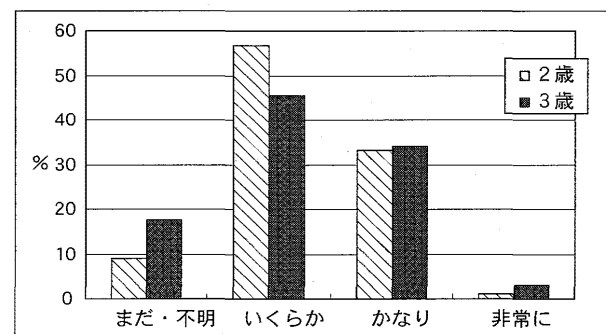


Figure 1 反抗的になったと感じるか

程度の差はあるが、8割から9割の子どもが反抗的になったと認識されていた。2歳では「いくらか」が6割近くを占めるが、これは反抗期の始まりを示しているのかもしれない。またどの年齢においても4割弱の子どもの反抗が「かなり」「非常に」と認知されてい

る。また、3歳では「まだ・不明」が約2割あったが、これらの回答欄には激しい反抗から抜け出したことを説明する記述があった。

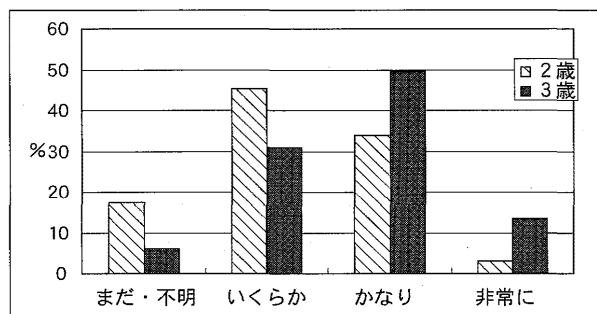


Figure 2 自己主張が強くなったと感じるか

一方、自己主張は2歳と3歳とでは異なった様相をみせている。2歳は「いくらか」が最も多くて4割強を占める。3歳では「かなり」が5割で最も多く、「非常に」も含めると6割以上の子どもが強い自己主張を示していると推測される。2歳と比較した3歳の特徴は、自己主張がより強まることにあるようだ。

(2) 子どもの反抗・自己主張の変化の評価

3歳時点で、母親が反抗・自己主張の変化をどのように評価したのかをFigure 3に示した。反抗と自己主張を比較すると、その評価が異なることがわかる。

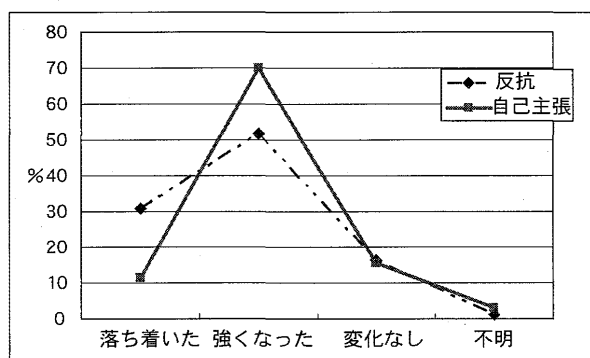


Figure 3 3歳時点における反抗・自己主張の変化 (2歳との比較)

まず、反抗は5割の母親は「強くなった」と回答した。「落ち着いた」は3割、「変化なし」は約2割であった。一方自己主張は7割の母親が「強くなった」と回答した。「落ち着いた」は1割、「変化なし」は約2割であった。反抗に比べて自己主張は3歳以降ますます増大することがうかがえる。

2. 子どもの反抗・自己主張の年齢による相違

(1) 子どもが反抗的になる時を集計した結果をFigure 4に示した。ここでは複数回答を求めたので、それぞれの場面の集計数を総回答数で除して割合を算出した。

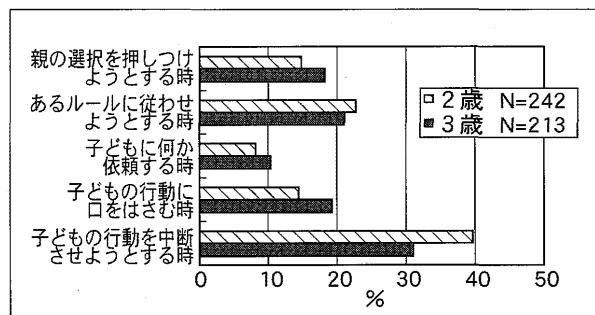


Figure 4 子どもが反抗的になる時

まず年齢による顕著な場面の違いは認められない。いずれの年齢でもどの場面にも該当者がいることがわかる。2歳では「子どもの行動を中断させようとする時」が4割と最も多く、次いで「あるルールに従わせようとする時」が2割強を占める。

3歳でも「子どもの行動を中断させようとする時」が3割強と最も多いが、他のどの場面もほぼ2割前後を占めている。つまり、2歳のように特定の場面で反抗的になるというよりは、さまざまな場面で反抗的になる傾向があるようだ。

Table 1 反抗的になる場面数の比較

	人数	総場面数	平均値	分布	SD	t 値
2歳	115	242	2.10	1-5	0.86	1.06
3歳	95	213	2.24	1-5	1.03	n.s.

次に、反抗的になる場面数に差があるかどうかを検討した。個人ごとの合計場面数を集計し、年齢ごとの平均場面数を算出した結果をTable 1に示した。2歳と3歳の平均場面数はそれぞれ2.10と2.24で、ここには有意な差はなかった。とはいえ、3歳の標準偏差が2歳より大きいことから、3歳になると個人差が大きくなることが推測される。

(2) 子どもの反抗・自己主張の変化

2歳と3歳の反抗・自己主張尺度の各項目の平均得点をTable 2に示した。有意な年齢差が認められたのは3項目であった。

2歳の平均値が有意に大きい項目は「かんしゃく

Table 2 2歳と3歳における子どもの反抗・自己主張尺度の平均値 (2歳が上段、3歳が下段)

項目	平均値	S D	2時点の差(t値) 有意確率
はっきりと自分のやりたいことをいう	3.78	1.18	-4.64
	4.34	0.78	.000***
「いやだ!」とか「やる」「欲しい」という主張を 繰り返し続ける	4.03	0.95	.00
	4.03	0.93	1.000
親のいうことに耳を貸さず、自分の思った通りに し続けようとする	3.21	0.99	-.56
	3.27	0.94	.577
かんしゃくを起したりだだをこねて我を通そうとする	3.48	1.08	2.19
	3.23	1.12	.031*
ものを投げたり叩いたりけったりして我を通そうとする	2.92	1.21	1.70
	2.68	1.25	.093
泣いて我を通そうとする	3.40	1.09	.24
	3.37	1.08	.812
祖父母や父親など甘い人に頼って自分の思い通り にしようとする	2.52	1.12	-2.70
	2.87	1.15	.008**
尺度の合計得点の平均	23.34	4.35	-.99
	23.78	4.66	.324

注. N=97 *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

Table 3 2歳と3歳における母親の感情尺度の平均値 (上段が2歳、下段は3歳)

項目	N	平均値	S D	2時点の差(t値) 有意確率
困惑してしまう	94	3.06	1.11	.38
	94	3.01	1.10	.70
腹が立ってしまう	95	3.35	1.04	-3.17
	95	3.68	1.05	.002**
いらだってしまう	96	3.47	0.99	-2.55
	96	3.72	0.99	.013*
馬鹿にされたように感じる	94	1.35	0.56	-4.79
	94	1.82	0.97	.000***
いやになってしまう	96	2.88	1.13	-2.39
	96	3.15	1.21	.019*
がっかりしてしまう	94	1.94	0.91	-2.40
	94	2.22	1.01	.018*
元気が出る	96	1.68	0.81	1.54
	96	1.55	0.83	.128
うれしい	94	1.83	0.94	1.80
	94	1.68	0.90	.075†
尺度の合計得点の平均	87	19.60	4.00	-2.91
	87	20.94	4.88	.005**

注. *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$ † $.10<p<.05$

を起したりだだをこねて我を通そうとする」($p<.05$)であった。一方3歳の平均値が有意に大きい項目は「はっきりと自分のやりたいことをいう」($p<.001$)と「祖父母や父親など甘い人に頼って自分の思い通りにしようとする」($p<.01$)の2つであった。3歳が言語発達によってより主張的になっていること、またかなりストラテジックな自己主張をしていることがうかがえる。なお、尺度の合計得点の平均値には有意差がなかった。

3. 子どもの年齢による母親の感情と対処の相違

(1) 母親の抱く感情

子どもの反抗・自己主張が、親の感情や行動にどのような影響を及ぼすかを検討する。各年齢の母親の感情尺度の各項目の平均得点をTable 3に示した。

有意な年齢差が認められたのは8項目中5項目、有意傾向が認められたのは1項目であった。2歳の平均値が有意に大きい傾向があったのは「うれしい」だけであった。3歳の平均値が有意に大きい項目は、「馬鹿にされたように感じる」($p<.001$)、「腹が立ってし

Table 4 子どもの反抗に対する母親の対応尺度の平均値（上段が2歳、下段は3歳）

項 目	N	平均値	S D	2時点の差(t値) 有意確率
腹が立って本気で怒ってしまう	96	2.73	0.88	-4.63
	96	3.16	0.96	.000***
いうことを聞かせるために体罰を加える	96	1.90	0.77	-2.62
	96	2.10	0.92	.010**
いうことを聞かせるために脅しを加える	97	2.18	1.05	-4.98
	97	2.72	0.99	.000***
いうことを聞かせるためにごほうび をちらつかせる	97	2.71	1.20	-0.89
	97	2.80	0.98	.378
もう知りません」といってしばらく 無視する	97	3.20	0.92	-1.56
	97	3.35	0.96	.124
外に出したり、別室に閉じ込めたりする	97	1.38	0.71	-2.76
	97	1.61	0.86	.007**
子どもが折れるまで初めの要求をし続ける	97	2.06	0.90	-2.00
	97	2.25	0.93	.049*
子どもが従うまで、根気よく待ち続ける	97	3.09	0.87	-0.19
	97	3.11	0.93	.847
自分が折れて、子どものいいなりに なってしまう	97	2.65	0.84	2.91
	97	2.38	0.91	.004**
子どもが納得できるようにいい方を いろいろと変えて説得を試みる	97	3.69	0.94	-2.35
	97	3.87	0.91	.021*
困惑して、どうしてよいか分からなくなる	97	2.18	0.94	-0.68
	97	2.25	0.97	.497
子どもの考えや反抗の理由をいわせ ようとする	97	2.37	1.09	-9.74
	97	3.30	1.01	.000***
とりあえず、子どもの好きなようにさ せてから、改めて初めの要求をする	97	3.15	0.96	1.18
	97	3.01	0.93	.242
尺度の合計得点の平均	118	2.56	0.41	-5.67
	96	2.76	0.41	.000***

注. *** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

Table 5 子どもの自己主張に対する母親の対応尺度の平均値（上段が2歳、下段は3歳）

項 目	N	平均値	S D	2時点の差(t値) 有意確率
危険でなかったり他人に迷惑をかけないものであ れば、子どもの主張を尊重し思い通りにさせる	94	3.85	.81	.63
	97	3.78	.84	.530
基本的には子どもの思い通りにさせる が、やり方などに条件をつける	97	3.32	.92	-2.24
	97	3.57	.97	.028*
子どもの主張を無視し、あくまでも親の 思い通りにさせようとする	97	2.20	.73	.55
	97	2.15	.74	.582
子どもに受け入れられるような妥協案を 考え提案する	97	3.11	.85	-3.10
	97	3.42	.84	.003**
一度いいだしたら聞かないので、放って おく	97	2.52	.79	1.58
	97	2.35	.87	.117
尺度の合計得点の平均	118	2.97	0.44	-1.16
	97	3.06	0.42	.248

注. ** $p<.01$, * $p<.05$

まう」($p<.01$)、「いらだってしまう」($p<.05$)、「がっかりしてしまう」($p<.05$)であった。加えて尺度の合計得点にも有意な差があり、3歳の母親の方が平均値が大きかった($p<.01$)。3歳の母親はさまざまな否定的感情をより強く感じているのである。

(2) 母親の反抗・自己主張への対応

子どもの反抗に対する母親の対応をTable 4に、子どもの自己主張に対する母親の対応をTable 5に示した。

それぞれの尺度の各項目の平均得点をみると、反抗への対応では有意な年齢差が認められたのは13項

目のうち8項目であった。2歳の平均値が有意に大きかったのは「自分が折れて、子どものいいなりにになってしまう」($p<.01$)の1項目だけであった。後の7項目、すなわち「腹が立って本気で怒ってしまう」($p<.001$)、「いうことを聞かせるためにごほうびをちらつかせる」($p<.001$)、「子どもの考えや反抗の理由をいわせようとする」($p<.001$)、「いうことを聞かせるために体罰を加える」($p<.01$)、「外に出したり、別室に閉じ込めたりする」($p<.01$)、「子どもが折れるまで初めの要求をし続ける」($p<.05$)、「子どもが納得できるようにいい方をいろいろと変えて説得を試みる」($p<.05$)は、3歳の母親の平均値が有意に大きかった。

自己主張への対応では5項目のうち2項目に有意な年齢差が認められた。それらは「一度いいだしたら聞かないので、放っておく」($p<.01$)、「基本的には子どもの思い通りにさせるが、やり方などに条件をつける」($p<.05$)で、いずれも3歳の母親の平均値が有意に大きかった。

これらの項目群には、一般に洗練された自己主張を育てるとされる対応と反抗や自己主張を押さえ込んでしまうと考えられる対応とがミックスされている。3歳の母親では、子どもを説得するための対応がとられている一方で、強圧的な対応も2歳より多く用いられているようだ。年齢によって母親の対応の構造が異なる可能性が示唆されるため、次に因子分析によって探索的に検討してみたい。

(3) 母親の対処の構造的変化

2時点の評定結果をそれぞれ主成分分析し、バリマックス回転をおこなった。その結果、2歳では抽出された6因子までで全分散の64.6%が説明され、3歳では抽出された5因子までで全分散の60.1%が説明された。2歳における母親の対処の因子構造をTable 6に、3歳における母親の対処の因子構造をTable 7に示した。

まず2歳の結果から検討する。第1因子は、「いうことを聞かせるために体罰を加える」、「いうことを聞かせるために脅しを加える」、「いうことを聞かせるためにごほうびをちらつかせる」、「『もう知りません』』といっただけで無視する」、「一度いいだしたら聞かないので、放っておく」といった強圧的な対応に関する項目からなりたっているため、〈力による統制〉と命名した。

第2因子は「とりあえず、子どもの好きなようにさせてから、改めて初めの要求をする」、「危険でなかつ

たり他人に迷惑をかけないものであれば、子どもの主張を尊重し思い通りにさせる」、「基本的には子どもの思い通りにさせるが、やり方などに条件をつける」、「(一)子どもの主張を無視し、あくまでも親の思い通りにさせようとする」といった子どもの立場を尊重した項目からなりたつため、〈子どもの立場を考慮した対処〉と命名した。

第3因子は、「腹が立って本気で怒ってしまう」、「外に出したり、別室に閉じ込めたりする」、「子どもが折れるまで初めの要求をし続ける」といった親の権威を行使する項目からなりたつため、〈権威的対処〉と命名した。

第4因子は、「子どもが納得できるようにいい方をいろいろと変えて説得を試みる」、「子どもの考えや反抗の理由をいわせようとする」、「子どもに受け入れられるような妥協案を考え提案する」といった親と子の交渉に関する項目からなりたつため、〈交渉による対処〉と命名した。

第5因子は、「自分が折れて、子どものいいなりにになってしまう」、「困惑して、どうしてよいか分からなくなる」といった親の困惑を示す項目からなりたつため、〈いいなり・放置〉と命名した。

第6因子は、「子どもが従うまで、根気よく待ち続ける」のみで、〈子どもを待つ対処〉と命名した。

次に3歳の結果を検討する。第1因子は、「腹が立って本気で怒ってしまう」、「『もう知りません』』といっただけで無視する」、「外に出したり、別室に閉じ込めたりする」、「子どもが折れるまで初めの要求をし続ける」といった親の権威を行使する項目からなりたつため、〈権威的対処〉と命名した。

第2因子は「いうことを聞かせるために体罰を加える」、「いうことを聞かせるために脅しを加える」、「いうことを聞かせるためにごほうびをちらつかせる」、「外に出したり、別室に閉じ込めたりする」、「(一)子どもが従うまで、根気よく待ち続ける」といった強圧的な対応に関する項目からなりたつため、〈力による統制〉と命名した。

第3因子は、「子どもが納得できるようにいい方をいろいろと変えて説得を試みる」、「子どもの考えや反抗の理由をいわせようとする」、「基本的には子どもの思い通りにさせるが、やり方などに条件をつける」、「子どもに受け入れられるような妥協案を考え提案する」といった親と子の交渉に関する項目からなりたつため、〈交渉による対処〉と命名した。

第4因子は、「(一)困惑して、どうしてよいか分か

Table 6 2歳における母親の対処の因子構造

項 目	因子負荷量					
	F1	F2	F3	F4	F5	F6
いうことを聞かせるためにごほうびをちらつかせる	.801	.104	-.138	.101	7.694E-02	7.911E-02
いうことを聞かせるために脅しを加える	.663	-3.664E-02	.359	.157	6.764E-02	-9.480E-02
「もう知りません」といってしばらく無視する	.536	-4.229E-02	.511	1.278E-02	7.341E-02	4.454E-03
一度いいだしたら聞かないので、放っておく	.516	6.279E-03	.169	-.253	.462	.150
いうことを聞かせるために体罰を加える	.467	-.100	.216	3.010E-02	-.296	-.410
危険でなかったり他人に迷惑をかけないものであれば、子どもの主張を尊重し思い通りにさせる	-.103	.761	.151	-6.226E-02	.129	-.125
基本的には子どもの思い通りにさせるが、やり方などに条件をつける	.172	.674	-.145	.430	.126	-.106
とりあえず、子どもの好きなようにさせてから、改めて初めの要求をする	.108	.644	-8.364E-02	5.307E-02	.192	.433
子どもの主張を無視し、あくまでも親の思い通りにさせようとする	.316	-.467	.283	8.682E-02	.298	-.241
外に出したり、別室に閉じ込めたりする	7.088E-02	.131	.766	-.182	-8.140E-02	-2.135E-02
腹が立って本気で怒ってしまう	.373	-.195	.588	-1.668E-02	.112	-.346
子どもが折れるまで初めの要求をし続ける	1.724E-02	-.435	.574	.264	.235	.238
子どもに受け入れられるような妥協案を考え提案する	.223	.177	-.253	.713	.140	-6.551E-02
子どもの考えや反抗の理由をいわせようとする	-1.939E-02	-4.739E-02	.353	.681	-.110	4.065E-02
子どもが納得できるようにいい方をいろいろと変えて説得を試みる	-9.681E-03	-2.187E-02	-.121	.671	4.534E-02	.324
困惑して、どうしてよいか分からなくなる	-8.013E-03	5.780E-03	6.071E-02	7.070E-02	.857	-.130
自分が折れて、子どものいいなりになってしまう	.178	.389	-6.339E-02	5.604E-02	.678	7.084E-02
子どもが従うまで、根気よく待ち続ける	3.222E-02	-5.672E-02	3.412E-02	.177	-.118	.850
累積寄与率	12.6	24.4	36.0	46.3	56.3	64.6

Table 7 3歳における母親の対処の因子構造

項 目	因子負荷量				
	F1	F2	F3	F4	F5
子どもが折れるまで初めの要求をし続ける	.781	-8.738E-02	.144	-.164	-4.891E-02
腹が立って本気で怒ってしまう	.709	.408	-4.728E-02	1.252E-02	-4.176E-02
「もう知りません」といってしばらく無視する	.680	.223	-.123	.183	.229
子どもの主張を無視し、あくまでも親の思い通りにさせようとする	.597	.148	.115	-.492	-5.070E-02
いうことを聞かせるためにごほうびをちらつかせる	-.108	.766	.283	.192	.126
いうことを聞かせるために体罰を加える	.304	.732	-2.757E-03	-.143	-9.790E-02
いうことを聞かせるために脅しを加える	.317	.665	-6.731E-02	-.164	.154
外に出したり、別室に閉じ込めたりする	.287	.453	.119	-3.604E-02	3.644E-02
子どもが従うまで、根気よく待ち続ける	.211	-.517	.287	.149	4.209E-02
子どもに受け入れられるような妥協案を考え提案する	-1.084E-02	9.069E-02	.748	-3.201E-02	.253
子どもの考えや反抗の理由をいわせようとする	-6.679E-02	.143	.713	-.246	1.825E-02
子どもが納得できるようにいい方をいろいろと変えて説得を試みる	7.529E-02	-3.939E-02	.595	.166	-5.638E-02
基本的には子どもの思い通りにさせるが、やり方などに条件をつける	.259	-.108	.579	.517	-2.786E-02
危険でなかったり他人に迷惑をかけないものであれば、子どもの主張を尊重し思い通りにさせる	-4.376E-03	-.133	9.187E-02	.796	.194
困惑して、どうしてよいか分からなくなる	.321	-5.143E-02	9.597E-02	-.568	.355
自分が折れて、子どものいいなりになってしまう	-5.004E-02	.118	.114	9.530E-02	.766
とりあえず、子どもの好きなようにさせてから、改めて初めの要求をする	-6.316E-02	-.257	.444	.142	.631
一度いいだしたら聞かないので、放っておく	.268	.185	-.332	-.240	.609
累積寄与率	14.0	27.7	40.6	50.7	60.1

は負荷量 |.40| 以上

らなくなる」、「危険でなかったり他人に迷惑をかけないものであれば、子どもの主張を尊重し思い通りにさせる」といった子どもの立場を尊重した項目からなりたつため、＜子どもの立場を考慮した対処＞と命名した。

第5因子は、「自分が折れて、子どものいいなりにになってしまう」、「とりあえず、子どもの好きなようにさせてから、改めて初めの要求をする」、「一度いいだしたら聞かないので、放っておく」といった親の困惑を示す項目からなりたつため、＜いいなり・放置＞と命名した。

以上にもとづいて2時点の母親の対処を比較すると、まず因子のまとまり具合からは、子どもの反抗・自己主張への対処が加齢によってより明確な構造をもつようになることが示唆された。すなわち、2歳では6因子であった構造が、3歳では5因子にまとまったからである。この変化は、子どもの反抗・自己主張の強まりがもたらしたものであろう。その結果、親の対処は力で抑える、権威に従わせする、あるいは子どもと交渉する、子どもの立場を考慮する、そしていいなりになる・放置するというパターンに収束する。

3歳時点の反抗や自己主張は、Figure 3の母親の評定結果からは強まる傾向が読みとれた。さらにTable 3の母親の感情尺度の平均値から、3歳の母親は全ての否定的感情をより強く感じていることがわかった。つまり、2歳時点に比べて3歳時点の反抗や自己主張への対処はかなり困難になっていることが示唆される。これらの結果にもとづけば、母親の対処構造の変化は必然的なものと考えられる。

4. 子どもの反抗・自己主張の発達の变化が母親へ及ぼす影響

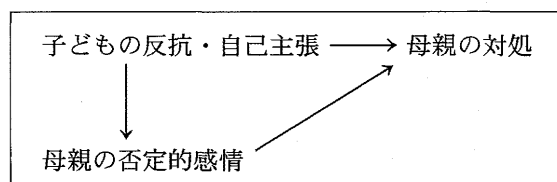
最後に、加齢による子どもの反抗・自己主張の変化が母親へ及ぼす影響を検討した。まず子どもの反抗・自己主張尺度7項目を因子分析したところ、2因子が抽出された。

2歳では「かんしゃくを起こしたりだだをこねて我を通そうとする」、「ものを投げたり叩いたりけったりして我を通そうとする」、「泣いて我を通そうとする」、「祖父母や父親など甘い人に頼って自分の思い通りにしようとする」の4項目（第1因子）と、「はっきりと自分のやりたいことをいう」、「「いやだ!」とか「やる」「欲しい」という主張を繰り返し続ける」、「親のいうことに耳を貸さず、自分の思った通りにし続けようとする」の3項目（因子2）とに分かれた。第1因子を

＜洗練されない自己主張＞、第2因子を＜明確な主張・意思表示＞と命名した。

3歳では「「いやだ!」とか「やる」「欲しい」という主張を繰り返し続ける」、「親のいうことに耳を貸さず、自分の思った通りにし続けようとする」、「かんしゃくを起こしたりだだをこねて我を通そうとする」、「ものを投げたり叩いたりけったりして我を通そうとする」、「泣いて我を通そうとする」、「祖父母や父親など甘い人に頼って自分の思い通りにしようとする」の6項目（第1因子）と、「はっきりと自分のやりたいことをいう」（第2因子）とに分かれた。第1因子を＜洗練されない自己主張＞、第2因子を＜言語的自己主張＞と命名した。

さらに、次のような分析モデルによってパス解析をおこなった。



その結果、2歳では＜洗練されない自己主張＞が「まつ」対処へマイナスの効果を及ぼし、さらに母の否定的感情を介して「力による統制」、「権威的」、「いいなり」といった対処へ影響を及ぼしていた。＜明確な主張・意思表示＞は直接的に「子どもの立場」、「交渉」といった対処へ影響を及ぼしていた。

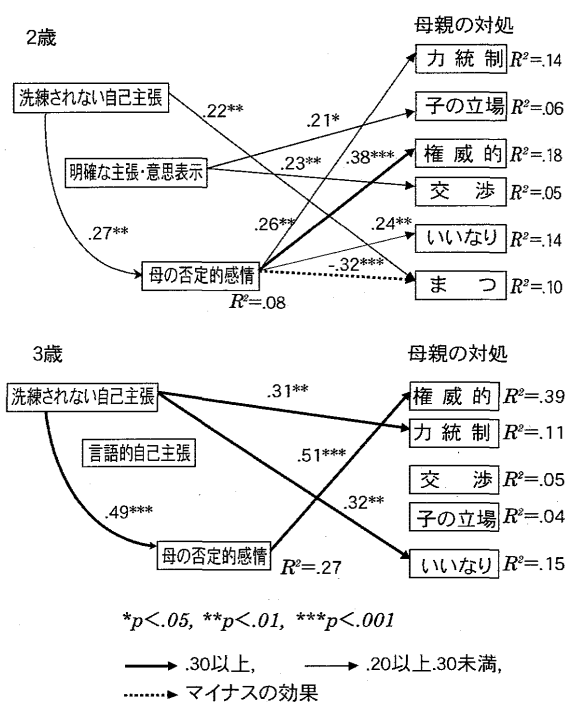


Figure 5 反抗・自己主張が母親に及ぼす影響

一方、3歳ではく洗練されない自己主張が直接的に「力による統制」、「いいなり」といった対処へ、またく洗練されない自己主張が母の否定的感情を介して「権威的」対処へと影響を及ぼしていた。

2歳と3歳の自己主張の形態が異なること、それによって母親の感情や対処への影響の及ぼし方が異なることがわかった。

全体的考察

本論の目的は、子どもの反抗・自己主張とそれに対処する親の行動を、2歳時点と3歳時点とで比較検討することであった。そのために5つの検討課題を設定したが、その分析結果を要約すると次のようになる。

反抗の程度は、2歳では「いくらか」が最も多く、これは反抗期の始まりを反映した結果と予測される。3歳でも「いくらか」が多いものの、激しい反抗が沈静化した子どもたちの存在も示唆された。またどの年齢においても約4割の子どもの反抗の程度は強いことがうかがわれ、個人差の大きいことが推測される。一方、自己主張は2歳と3歳とでは異なった様相をみせ、3歳の子どもの6割以上が強い自己主張を示していた。

3歳時点における反抗・自己主張の変化についての母親の評価は、反抗と自己主張では異なった。反抗は5割が強まったと評価し、自己主張は7割が強まったと評価した。

これらの結果より、発達的变化の特徴は自己主張の強まりであることが推測され、さらに3歳以降の自己主張のゆくえを検討する必要がある。

子どもが反抗的になる時(場面)を集計した結果から、2歳では「子どもの行動を中断させようとする時」が最多で、次いで「あるルールに従わせようとする時」が多かった。これに対して3歳では場面を特定できず、むしろどのような場面でも反抗的になることが推測された。

子どもの自己主張の質的变化も明らかにされた。2歳と3歳の自己主張尺度の各項目の平均得点の検討から、2歳では、「かんしゃくを起したりだだをこねて我を通そうとする」のに対し、3歳の子どもの言語発達によってより主張的になること、またストラテジックな自己主張をすることが推測された。この変化にいかに対応するかが、正に親側の課題となる。

3歳頃になると、言語発達や認知発達が一層進展する。子ども側の主張の意味や意図が、親側には把握し

やすくなると考えられる(高濱・渡辺・坂上・高辻・野澤、投稿中)。このような理解をベースに、多くの親は生活習慣の確立をめざして子どもの動機づけを高めるようなかわり方をするようになる(高濱・渡辺・坂上・高辻・野澤、投稿中)。とはいえ、子どもはさまざまな言い訳をし、理屈をいうようになるから、簡単には親のいうことにしたがわなくなる。そうだとすれば、親はより否定的な感情を喚起されることになり、子どもへの対処行動は2歳時点よりも困難になることが予想される。

この予想を裏づけるように、3歳の母親は2歳の母親よりも多様な否定的感情をより強く感じていた。2歳の親は、子どもが乳児期から脱すること、すなわち反抗や自己主張に成長の証を感じている段階と考えられる。一方3歳では現実の生活の中で、親の対処の範囲をこえるような子どもの反抗や自己主張が展開されているものと推測された。

子どもの加齢による反抗・自己主張の変化は、母親の実際の対処に影響を及ぼしていた。3歳の母親では、子どもを説得するための対応がとられている一方で、強圧的な対応も2歳より多く用いられていた。母親が子どもの発達的变化に対処しようと試行錯誤する様相がみてとれる。

母親の対処に関する項目群には、洗練された自己主張を育てるとされる対応と反抗や自己主張を押さえ込んでしまうとされる対応とがミックスされていた。加齢によって母親の対応の構造が異なる可能性が示唆されるため、2歳と3歳の母親の対処を因子分析によって比較した。子どもの反抗・自己主張の強まりにしたがって、親の対処の構造はより明確になり、権威に従わせる、力で統制する、子どもと交渉する、子どもの立場を考慮する、いいなり・放置するというパターンに変化していた。

最後に、パス解析によって加齢による子どもの反抗・自己主張の変化が母親へいかなる影響を及ぼすのかを検討した。発達的には、子どもの反抗・自己主張は言語による明確な自己主張とそれ以外のいわゆる洗練されない自己主張とにわかれた。そして、洗練されない自己主張が母親の否定的感情へと影響し、さらにその感情を介して権威的対処へ影響を与えることが明らかとなった。2歳においても、明確な主張・意思表示は子どもの立場を考慮した対処や交渉といった、子どもの視点や親子双方の視点にもとづく対処を予測することが明らかとなった。

本論では2歳と3歳での子どもの反抗・自己主張

と母親の行動の違いを明らかにしようとした。つまり2時点間の相違を検討したものであった。今後さらに縦断データの特性を活かし、より因果関係を明確にするような分析をおこなうことが必要である。

加えて、子どもの反抗や自己主張にも、親側の対処にも個人差の存在が示唆された。親側の対処の個人差は、子どもの反抗や自己主張の個人差を反映したものであるのだろうか。あるいは高濱・渡辺(2006)が指摘する子どもの扱いにくさや子どもの気質に対する親の認知を反映しているのだろうか。さらに1歳時点からの追跡データの特徴を活かすような手法を用いて検討したい。

一方、親の対処の個人差が、子ども側の変数とは独立した母親をとりまく生態学的変数(例えば夫婦関係やソーシャルサポートの質など)との関係も示唆される。先行研究(氏家・高濱;1994)では、このような変数の存在が子どもをとらえる母親の知覚をゆがめる可能性も指摘されている。また、高濱・渡辺(2004;2006)からは、子どもの扱いにくさの認識が母親としての自己評価を低下させることや、扱いにくさを認識する理由が子どもの年齢によって異なることが明らかにされている。変数間の影響を考慮した分析モデルによって、さらにこれらの課題を検討する必要があるだろう。

このような検討を加えることによって、より母親側に焦点化した育児支援が可能になると考えられる。

文献

- Erikson, Erik H.(1989). ライフサイクル, その完結. 村瀬孝雄・近藤邦夫, 訳. 東京: みすず書房. (Erik H. Erikson.(1982). The life cycle completed. New York: W. W. Norton.).
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 坂上裕子. (2005). 子どもの反抗期における母親の発達: 歩行開始期の母子の共変化過程. 東京: 風間書房.
- 高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野澤祥子. (投稿中). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス: 母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係.
- 高濱裕子・渡辺利子. (2006). 母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ: 1歳から3歳までの横断研究. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要第3号, 1-7.
- 高濱裕子・渡辺利子. (2004). 2～3歳児をもつ母親の自己評価: 子どもの扱いにくさおよび発達との関係. 相山女学園大学研究論集, 35(社会科学篇), 79-90.
- Ujiie, T.(1977). How do Japanese mothers treat children's negativism? Journal of Applied Developmental Psychology, 18, 467-483.
- 氏家達夫. (1995). 自己主張の発達と母親の態度. 二宮克美・繁多進(執筆代表). たくましい社会性を育てる(pp.51-67). 東京: 有斐閣選書.
- 氏家達夫・高濱裕子. (1994). 3人の母親: その適応過程についての追跡的研究. 発達心理学研究, 5, 123-135.

付記

本研究に長期間ご協力くださいました保護者のみなさまに心よりお礼を申し上げます。また調査を実施するにあたり、愛知県日進市、同尾張旭市、東京都西東京市の母子保健担当各位に多大なご協力をいただきました。記して感謝いたします。

本研究は平成16年度・平成17年度科学研究費補助金基盤研究C(2)課題番号16500490(研究代表者: 高濱裕子)の補助を受けた。